

戦間期日本の大衆婦人雑誌にみる「職業婦人」イメージの変容

山崎 貴子（京都大学大学院）

1. 問題の所在

第一次大戦後の日本では、女子就学率の急激な高まりと第三次産業の発達などの産業構造の変化により、従来男性の仕事とされてきた分野や新しく誕生した分野の職業に就く「職業婦人」が急激に増加していた（富澤 2005）。また、同時期に発達した大衆婦人雑誌では、「職業婦人」に関する記事が頻繁に掲載された。

このような女性の職業進出の急激な増加のなかで、彼女らの職業的社会的化や職業アスピレーションの形成に、同時期に発達したマスメディア、特に大衆婦人雑誌はどのような役割を果たしていたのだろうか。

教育社会学の分野においては、以前から女性の職業的社会的化や職業アスピレーションの形成に影響を与える重要な要因として、マスメディアの教育的機能も指摘されているものの（中山 1985）、実際にそれがどのようなものであったのかということは、あまり検討されてこなかった。

ただし、女性の就業に限定しなければ、近代日本社会における女性の社会的化やアスピレーション形成に影響を与えるマスメディアの教育的機能に注目した研究は行われてきている。

木村（1989a）は、戦前の婦人雑誌において描かれた女性像の検討を通して、女性の生き方に関するどのような価値観が読者に伝達されていたのかということを明らかにしている。また、木村（1989b）は、雑誌『主婦之友』における女性の一代記、半生記の記事分析を通して「賞賛されるべき女性」のタイプを抽出し、女性にとっての「立身出世主義」の検討とそれぞれの類型が日本の近代化に果たした社会的機能の考察を行っている。

今田（2007）も、雑誌『少女之友』において、理想的な女性として示されている著名な女性の類型化と紙面に登場する主要な類型の時代による変遷の検討を通して、都市新中間層の少女たちの欲望をかきたてた「成功」をめぐる意味付けを考察している。

先行研究では、「女性」「主婦」「少女」に関しては、女性の社会的化やアスピレーション形成に対するマスメディアによる教育的機能の解明とその社会的意味が検討されてきている。しかし、「職業婦

人」を主な対象とした研究はなく、木村（1989a、1989b）でも、部分的な言及にとどまっている。

よって、本研究では、近代日本社会におけるマスメディアと女性の職業的社会的化の関係を検討することを目的として、戦前の大衆婦人雑誌に提示された「賞賛すべき職業婦人」のタイプと、記者や知識人による職業婦人に関する議論の変遷を検討する。以上を通して、大衆婦人雑誌におけるそれらの記事は、どのような「職業婦人」イメージを形成し、青年期女性の職業的社会的化や職業アスピレーションの形成にどのような機能を果たしていたのか、またそこにはどのような社会的背景があったのかということを考察する。

2. 資料と方法

本研究で分析に用いる資料は、『婦人倶楽部』（1920〔大正9年〕10月創刊、大日本雄弁会講談社）である。『婦人倶楽部』の選択理由は以下の二点である。

- ①戦前の婦人雑誌の中で、『主婦之友』と並んで発行部数が多く最もよく読まれた雑誌であったこと。
- ②『婦人倶楽部』の想定する主な読者層は20代前半の女性であり、職業婦人の主要な年齢層と一致していたこと。

分析は、以下の二つの方法で行った。

- ①「賞賛すべき職業婦人」類型の検討：『婦人倶楽部』における職業婦人に関する記事のうち、「模範婦人」や「〇〇評判記」などの形で記者や執筆者によって模範的・肯定的に描かれる記事に登場した女性、賞賛すべき女性を集めた座談会に出席した女性、自らの就業経験を肯定的に語った手記が掲載されている女性をすべて抽出し、以下に提示する類型別に分類した。次に、職業婦人を職種別に「女史系職業婦人（就業に高い技能や技術、学歴を必要とする古くから存在した職業婦人）」「BG（＝ビジネスガール）系職業婦人（第一次大戦以後急激に増加した事務・接客など近代セクターで働く職業婦人）」の2タイプに分類した。そして、それぞれの「賞賛すべき職業婦人」類型にそれぞれの職業婦人タイプがどのくらい該当するのかを1920-45年までの時期を5年ごとに区切ってまとめ、時期ごとに検討した。

②記者や知識人による「職業婦人」に関する議論の検討:「職業婦人」をどのような存在としてとらえ、どのような観点から議論をしているのかに注目して検討した。

3. 賞賛されるべき職業婦人の分類

資料から「賞賛されるべき職業婦人」として取り上げられている女性以下の8つのタイプに分類される。

- 1 共働き賞賛型: 商売や事業、雇用者として夫婦共働きでの奮闘が賞賛される女性
- 2 不遇克服賞賛型: 夫の病気・死亡・放蕩や離婚、婚期を逃したなど不遇後の職業的奮闘が賞賛される女性
- 3 地位名声賞賛型: 職業的地位や名声が賞賛される女性
- 4 実務賞賛型: まじめさや働きぶりなど、職場での実務そのものが賞賛される女性
- 5 貯蓄賞賛型: 多額の貯蓄が賞賛される女性
- 6 婚資準備賞賛型: 自分の稼ぎで結婚資金を準備したことが賞賛される女性
- 7 良縁賞賛型: 職場での働きぶりがもとで良縁を得られたことが賞賛される女性
- 8 戦争貢献賞賛型: 戦場への従軍や、銃後の労働が賞賛される女性

4. 各時期の主要な「賞賛されるべき職業婦人」類型と職業婦人に関する議論の特徴

1) 1920年代: 男性立身出世主義との同型性

1920年代は、男性の立身出世主義と同型の「地位名声賞賛型(非不遇)」が「賞賛すべき職業婦人」像として非常に高い割合で取り上げられた。そして「地位名声賞賛型(非不遇)」に該当する職業婦人のほとんどが女史系職業婦人であった。

また、この時期の記者や知識人による職業婦人に関する議論でも「男性化」・「家庭の破壊者」など女性でありながら男性と同じ役割を担う存在として想定されたうえで、本来の女性役割からの逸脱に対する批判がなされた。また一方で、向学心・進学熱の高まりの結果として一定以上の学歴を獲得した女性の職業参入が増加することは、男性と同じ立場を獲得しようとする、自立をめざす自覚ある女性が増加することであるととらえられていた。以上のようにこの時期の職業婦人には、男性と同様の立身出世主義が職業アスピレーションを加熱させるものとして雑誌上で提示されていた。そしてそこには学歴が同じでも就業しない女性が大多数であるなかで、女性全体のなかでの女史系職業婦人の先進性や優位性を男性と同様の立身出世主義を媒介にして正当化するという機能があつ

たと考えられる。

2) 1930年代: 中流家庭未婚婦人と同目標の共有

1930年代の特徴は、「賞賛すべき職業婦人」像としてBG系職業婦人の「実務賞賛型」への集中が顕著な点である。そして1930年代後半には、職場での働きぶりが評価され良縁が得られるといった「実務賞賛型」の変種である「良縁賞賛型」が登場した。ここで提示された「良縁」は同年代の中流家庭の未婚婦人の目標と同じものであった。

また、この時期の記者や知識人による職業婦人に関する議論としても、職業婦人の結婚に注目が集まった。そのなかで、女性の就業は学卒から結婚までに期間が限定されるとともに、学卒後家庭にとどまるよりも職業婦人となった方が人との接触の機会が増え、自分の働き次第で良縁が得られることが積極的に説かれた。その一方で、享乐的で軽薄・華美な「モダンガール型」や現実的で理想が高く、勤続年数の長い「すれっからし型」の職業婦人が批判の対象となり、このような逸脱的職業婦人化を規制するロジックとしても「良縁が得られない」ことが語られた。以上のように、この時期の職業婦人には、中流家庭の未婚婦人の目標と同様の良縁を得られるということが、職業アスピレーションを加熱させるものとして雑誌上で提示されていた。これは、当時の職業婦人の多くを占めていたBG系職業婦人の置かれた低賃金や職業的社会移動の閉鎖性、企業による若年退職の奨励という企業の女性雇用戦略(金野 2000)に対して、「良縁」というロジックで別種の社会移動の可能性を提示することによって葛藤の解消を図るという機能を果たしていたと考えられる。

3) 1940年代: 戦時における労働価値の上昇

1940年代は紙面が戦時体制一色となると共に、「賞賛すべき職業婦人」像の大半が「戦争貢献賞賛型」となる。また、記者や知識人の議論のなかで職業婦人は労働婦人と共に「勤労婦人」と呼ばれるようになり、「お国のために尽くす尊い存在」と位置づけられ、職業アスピレーションが加熱された。そしてそれは総力戦体制における女性の動員を促進させる機能を果たしていたと考えられる。

5. 終わりに

戦間期の主要な「賞賛すべき職業婦人」像の変容は以上のようにまとめることができた。ここには、1920年代後半以降の『婦人倶楽部』の大衆化による読者層の広がりの影響がうかがえるとともに、戦後の学卒後青年期未婚女性の職業アスピレーションのさきがけを垣間見ることができる。

(詳細な資料と引用文献は当日配布の資料をご参照ください。)